

こんにちわ！リョイです。今回は
表紙とおすめ本を書かせて頂きました。

ますます寒さが強まりコロナウイルスも
猛威を振るっていますね。私も部活が
休止され、家にいる時間が増えたので
この機会に手紙を本に読みたいたい
と思っています。皆様も暇つぶしとして本を
手に取って読んではいかがでしょうか？

そんなところで、今回私がおすめする本
「80-エッセイ」の
ですが、テーマとは全く
関係ありません。(冬の本
思いつきませんでしよ。) 
それとは関係なく、とても良い
本なので、是非読んで
みて下さい！現在KADO
KAWAから8巻まで
出ています！

ではこんな所で、次回も
よろしくお願ひします！

YAボランティア募集中

どんな活動かをしているの？
・どうしたら参加できるの？

少しでも興味のある方は
中央図書館まで「お気軽に
お問い合わせください」→



次回
の
ご
参
加
お
待
ち
し
て
お
り
ま
す
!!

イベント報告

オンラインで ビブリアオバトル

2020年
12月13日(日)にZoomで
開催しました。

小学生～大人の方まで幅広い
参加があり、紹介された本も
バラエティに富んでいました。

★チャンプ本★
『ふしぎ駄菓子屋銭天堂』
廣嶋玲子/作 偕成社

(以下五十音順)

『紅蓮館の殺人』
阿津川辰海/著 講談社

『最後だとわがっていたら』
一ノ瀬コネクト・マレーク/イサ
サンワタリ・パブリッシング

『進撃の巨人 1～32巻』
+別冊少年マガジン2020年10月号
諫山創/著 講談社

『猫を抱いて象と泳ぐ』
小川洋子/著 文藝春秋

YA広報誌『ポルターダ』No.58
2021年2月発行

編集・YAボランティアさん(リョイさん)

・実習にいらした先生方
・稲城第六中学校の方

ありがとう
ございます！

稲城市立中央図書館(向陽台4-6-18)

Tel 042-378-7111 Fax 042-378-7162

Mail inagilib@library.inagi.tokyo.jp

HP https://www.library.inagi.tokyo.jp

(図書館スタッフ)

新年が始まり1ヵ月。

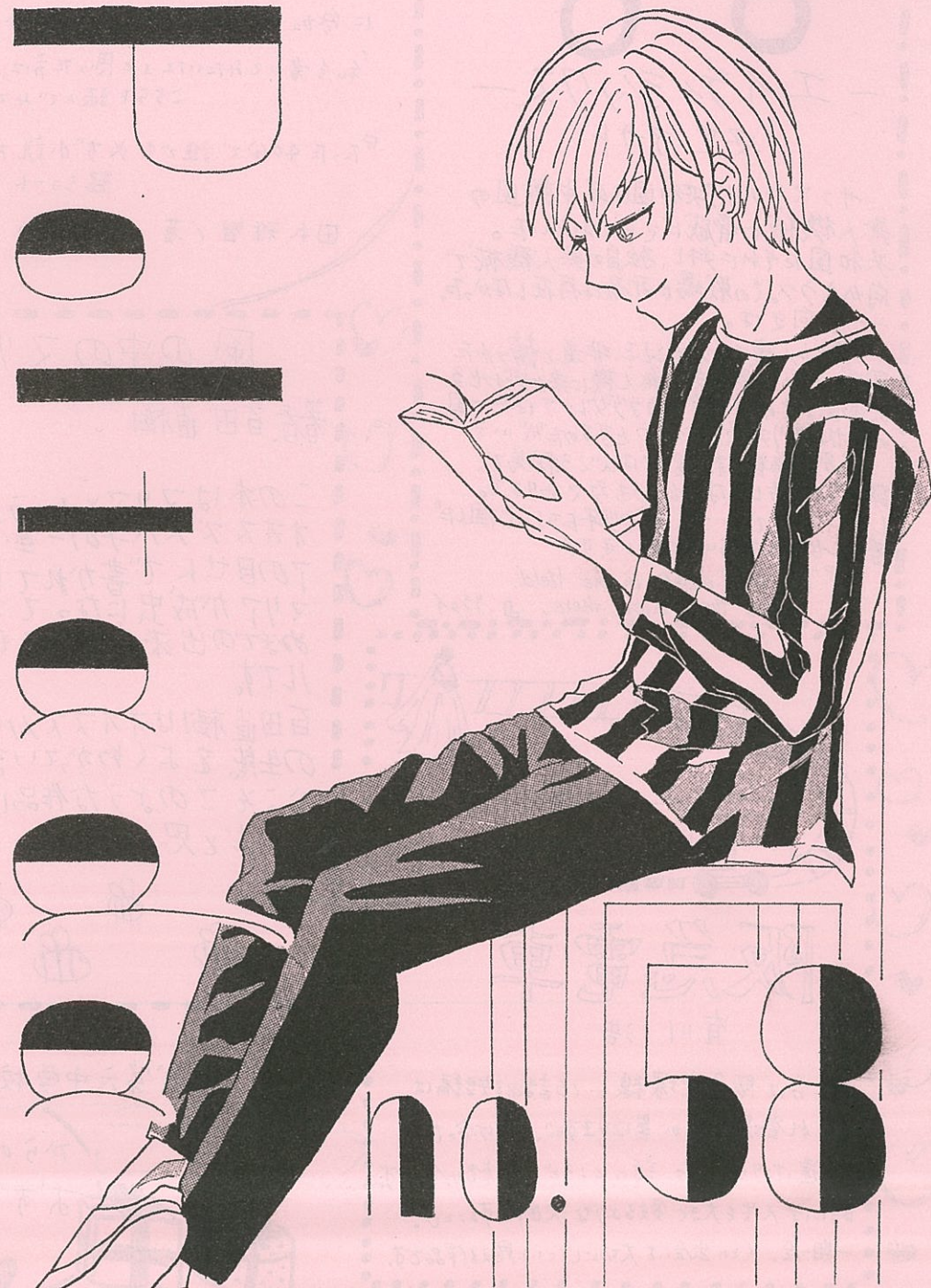
皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

私は「令和3年」と書くことが

未だに慣れません。

「2021年」はあと出るのに...

さて、今年はどんな1年に
なるでしょうか。



86

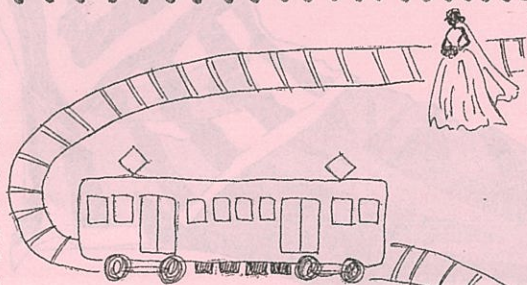
— エイティシックス —

安里 アサト

サンマグノリア共和国は年中敵国の無人機械の脅威にさらされていた。共和国はそれに対し、独自の無人機械で向かえう。その戦場に死者は存在しなかった。——表向きは、

「豚に人権を与えぬ」といふ、非道と誇られた国家は、いよいよ異民族と無人機に乗せ戦わせた共和国。その指令官である少女レーナは共和国の現状に憤り、対戦を変えようとするのだった。差別と偽善と絶望がはびこる戦場で、読んでいて苦しくなるところを多々あります。しかし、その先でレーナと戦う少年正とが、国に答えてくれる見えてもらいたいです！

「The dead aren't in the field.
But they died there.」 Yシャイ



阪急電車

有川 浩

舞台は阪急宝塚線。16話ある短編は、それぞれ登場人物が異なりますが、助け合ったり、すれ違ったりしながら話のところで絡み合います。時には人生を大きく変えるような決断をする。一期一会。人との出会いを大切にしたいと思える作品です。

イベント「ショートショート」の書き手講座

(開催: 2020年 9月13日 講師: 田村 雅智 先生)

に参加された方の作品をご紹介します。

「私も書いてみたい」と思った方は、こちらを読んでみてください。↓

「たった40分で誰がもめず小説が書ける
超ショートショート講座」

田村 雅智 / 著 WAVE出版 Y901.3/7

風の中のマリア

著者 百田 直樹

この本はマリアという名前のオオズメバチの一生がマリアの目センで書かれています。マリアが成虫になってから死ぬまでの出来事がとてもリアルです。

百田直樹はオオズメバチの生態をよくわかっているからこそこのような作品になったのだと思います。



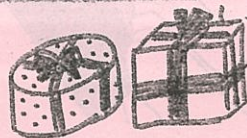
稲城第六中学校の方

先生

からの

おすすめ本

です



エス市連続失踪事件

馬場俊輔 / 作

「なにっ。また失踪事件がおきたのか。」

エス市では近頃、失踪事件が多発していた。しかしそれは普通の失踪事件ではなく、被害者が突然 100km 離れた場所に瞬間移動した、などという奇怪な事件であった。

この事件に警察は頭を悩ませ続けていた。この事件の担当であるエヌ氏は言う。

「最初の事件から一ヶ月が経ったというのに、犯人の目星すらつけられん。」

しかし一つだけ、全ての事件に共通する証拠があった。それは、どの現場にも同じ本が落ちているということだった。

「やっぱり、この本が手がかりなんですかねえ。」

新人のアール君はそう言う。本をエヌ氏に手渡した。

「うむ。考えられんことだが、この本しかないな。」

というのも、この本には不思議な事がいくつもあって、例えばその本に被害者全員の名前が書いてあることや、この本を証拠として持ち帰ってもいつの間にか消えていることだ。

「このままじゃ、犯人はどこかへ逃げおおせてしまいますよ。」

アール君は心配そうに続ける。

「また同じ事件が起こってしまうかも。」

エヌ氏は、長年の経験から、ある考えを思いついていた。

「アール君、あまりに馬鹿馬鹿しくて言うのをこぼんでいたんだが、いいかね。」

「なんででしょうか。」

「この本に、『この本の持ち主』と書きこんでみるというのはどうだろうか。」

アール君ははっとして言う。

「やってみましょうよ。私もそれを考えていた所です。」

エヌ氏はうなずくと、『この本の持ち主』と本に書きこんだ。すると目の前に男が現れた。

見事犯人は捕まり事件は解決した。